鹿児島純心女子短期大学研究紀要　第38号，75－91　2008

栄養教諭制度の施行に伴う教育活動記録－Ⅲ

―鹿児島県における栄養教育実習担当教諭と小・中学生の食育に関する意識調査について―

大富あき子*，大内山雅枝**，花木　秀子*

Educational activity corresponding to enforcement of the nutrition teacher's system－Ⅲ
Questionnaire survey on the food education to the teachers of nutrition teacher training and students in Kagoshima Prefecture

Akiko Otomi*, Masae Ouchiyama**, Hideko Hanaki*

平成17年度より栄養教諭制度が施行されたことに伴い，本学が行った課程認定申請及び認定後の授業開講までの準備過程を第1報とし，鹿児島県内学校栄養士を対象とした「食育と栄養教諭制度に関する意識」についてのアンケート調査結果を第2報として報告した。それに引き続き，本報では，栄養教育実習担当教諭と児童生徒を対象に実施した食育に関する意識調査をまとめたので報告する。

指導教諭は食育の必要性は認識しているが，検討課題として「時間確保が困難」，「家庭や地域との連携」などをあげる一方で，栄養教育実習に向けた前向きな改善意見が多数あがり，食育の実施を前提とした意識が非常に高いことがわかった。

また，児童生徒は食に対する意識が普段から高く，家庭内において手伝いなども行っているが，栄養教育実習生の授業を受講した後の食に対する考えの変化をみると，特に，低学年ほど素直に授業内容を受け入れていることがわかった。

Key words:［栄養教諭］［食育］［教育実習］［アンケート］

（Received September 18, 2007）

Ⅰ．緒　言

平成17年度より栄養教諭制度が創設され[1)]，本学においても栄養教諭二種免許の課程認定を受けた。著者らは，平成18年度の本学紀要で，文部科学省に対して行った課程認定の申請及び認定後の栄養教育実習開講に至るまでの準備活動記録と，栄養教諭免許取得第一期生となる平成17年度入学生に行った「栄養教諭に関する意識調査」結果を第1報[2)] として報告した。

＊　鹿児島純心女子短期大学生活学科食物栄養専攻（〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号）
＊＊鹿児島純心女子短期大学非常勤講師（〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号）

さらに，第2報[3]では，鹿児島県内学校栄養士を対象として「食育及び栄養教諭制度」に関する意識についてのアンケート調査を行った結果として，「栄養教諭の職務内容が不確立な状態での制度移行であり管理職等の理解が途上にあること」，「仕事が増加することによる業務の効率化が不可欠なこと」，「栄養教諭としてさらなる自己研鑽の必要性を感じている」ことなどの現状を報告した。

第3報となる本報では，平成18年5～6月，本学食物栄養専攻2年次学生42名が自校式もしくは給食管理センターにおける1週間の学校給食管理実習後に行った，小中学校における1週間の栄養教育実習の際に実施したアンケート結果をまとめた。指導教諭に対しては，「食育の必要性」，「学校での実施状況及び栄養教育実習に関する意見」を，児童生徒に対しては「食に関する普段の考え」，「家庭内における手伝いなどの行動」，「実習生による授業を受けた後の食意識の変化」について質問し，若干の知見を得たので以下に報告する。

Ⅱ．方　法

平成18年6月，1週間の栄養教育実習終了時に，教育実習指導教諭に対して「食育に対する意識」をアンケートにより質問し，27名の回答を得た（回収率64.3%）。

一方，小・中学生に対しては，本学学生による評価授業後に集合法でアンケート調査を実施し，小学生703名，中学生477名の合計1180名から回答を得た（回収率100%）。

アンケートの項目は，以下に示す通りである。

小学1年生から中学3年生までと幅広い年齢差だったため，理解度を考慮し内容は同一で文言を変えた質問紙を2種類作成した。

なお，小･中学生においては，学年による履修科目の異なりを考慮し，小学校低学年（1･2年生）130名，小学校中学年（3・4年生）260名，小学校高学年（5・6年生）313名，中学1年生309名，中学2・3年生168名の5群に分類して比較した。集計はSPSS12.0を用い，単純集計，クロス集計を行い，χ^2検定で有意差の検討を行った。また，有意差を認めなかった質問項目に関しては1180名全体の回答を検討し，有意差のある質問項目に関しては，次の計算式より求めた残差による比較検討を行った。[4]

計算式　L行M列のL×M分割表のｉ行ｊ列目の実測度数をf_{ij}，期待度数をt_{ij}，度数合計をNとする。

標準化残差　$e_{ij} = \dfrac{f_{ij} - t_{ij}}{\sqrt{t_{ij}}}$

e_{ij}の 分散$V_{ij} = \left(1 - \dfrac{n_i}{N}\right) \times \left(1 - \dfrac{n_j}{N}\right)$

調整済み残差$d_{ij} = \dfrac{e_{ij}}{\sqrt{V_{ij}}}$

調整済み残差d_{ij}は，平均0，標準偏差1の正規分布に近似的に従うので，$|d_{ij}|$が2以上のものは特徴的な箇所とみなせる。

【指導教諭対象のアンケート調査紙】

食育および栄養教諭に関する意識調査のお願い

このアンケート調査は，今後の学生指導と栄養教諭制度の充実および改善を目的としたものです。ご多忙な中，誠に申し訳ございませんがご協力の程，よろしくお願い申し上げます。

なお，先生方の個人名等が外に出ることは一切ございませんので，日頃，感じておられる「食育及び栄養教諭制度」について率直なご意見をお聞かせください。

■　当てはまるところに○をつけるか，（　　）内に記述でご回答ください。

問1. 先生の考えられる食育とは，どのような教育だと思われますか。簡単にご記入ください。
（　　）

問2. 栄養教諭の教育実習生を指導される上で，困られたことがありましたか。
1. ある　　2. ない

※「1. ある」と回答された先生にお伺いします。それはどのようなことだったのでしょうか。
（　　）

問3. ゆとり教育の見直しが検討されている現時点において，「食育の時間」を確保することに対し，先生はどのようにお考えでしょうか。
1. 食育は必要なので，時間がなくても確保したいと思う
2. 食育は必要だが，時間がないので確保は困難であると思う
3. 食育より他の教科のレベルを上げることが優先であると思う
4. その他（　　）

問4. 先生が現在所属されている学校では，食育はどの程度実施されていますか。
1. 十分実施している　　2. 不十分だが一応実施している
3. ほとんど実施していない　　4. 全く実施していない
5. その他（　　）

問5. 今後の栄養教育実習に対する指導は，栄養教諭のみが担当すべきと思われますか。
1. はい　　2. いいえ

※「2．いいえ」と回答された先生にお伺いします。その理由をお聞かせください。
（　　）

問6. 今後も，栄養教育実習には教科担当の先生方がたずさわる必要があると思われますか。
1. はい　　2. いいえ

※　関与する教科名をご記入ください。（　　）

問7. 食育の現状として，学校・家庭・地域の連携がとれていると思われますか。
1. はい　　2. いいえ　　3. その他（　　）

問8. 栄養教育実習に際して，事前に当方で指導しておいて欲しいことがありましたらお書き下さい。（　　）

ご協力の程，誠に有難うございました。今後さらに精進すべく努力いたします。

鹿児島純心女子短期大学

【小学生対象のアンケート調査紙】

先生の食べものについての話を聞いて，どのように思いましたか。
あてはまる番号に○をしてください。

あなたは（　　）年生の　　1. 男子　　2. 女子

問1. 家で，ごはんの前や後にお手つだいをしていますか。
　1. している　2. していない　3. どちらでもない

問2. 食べることは楽しいですか。
　1. 楽しい　　2. 楽しくない　3. どちらでもない

問3. 今日の話は，とても大切なことだと思いましたか。
　1. 思う　　2. 思わない　　3. どちらでもない

問4. 食べることは大切なことだと思いましたか。
　1. 思う　　2. 思わない　　3. どちらでもない

問5. 食べることと元気でいることは，つながっていると思いますか。
　1. 思う　　2. 思わない　　3. どちらでもない

問6. 今日の話に出てきた食品を使った料理を，自分でも家で作ってみたいと思いましたか。
　1. 思う　　2. 思わない　　3. どちらでもない

問7. 今までより，食べることが好きになりましたか。
　（今までより，食べることへの関心が高まりましたか）
　1. 思う　　2. 思わない　　3. どちらでもない

ありがとうございました。

【中学生対象のアンケート調査紙】

教育実習生による食生活の話を聞いて，どのように思いましたか。
あてはまる番号に〇をしてください。

あなたの学年は（　　）年生，　性別は　　1. 男子　2. 女子

問1. 家で，食事の準備，後片付けなどの手伝いをしますか。
　　1. している　2. していない　3. どちらでもない

問2. 食べることは楽しいですか。
　　1. 楽しい　　2. 楽しくない　3. どちらでもない

問3. 今日の話は，とても大切なことだと思いましたか。
　　1. 思う　　2. 思わない　　3. どちらでもない

問4. 食事は大切であると思いましたか。
　　1. 思う　　2. 思わない　　3. どちらでもない

問5. 食べることと健康には，関連があると思いますか。
　　1. 思う　　2. 思わない　　3. どちらでもない

問6. 今日の話に出てきた食品を使った料理を，自分でも家で作ってみたいと思いますか。
　　1. 思う　　2. 思わない　　3. どちらでもない

問7. 今までより，食べることへの関心が強くなりましたか。
　　1. 思う　　2. 思わない　　3. どちらでもない

ありがとうございました。

Ⅲ．結果および考察

(1)　栄養教育実習指導教諭の食育に対する意識について

1）指導教諭の考える食育について

「問1．先生の考える食育とは，どのような教育だと思われますか。簡単にご記入ください。(自由記述)」に対する回答としては，表1のような意見があげられた。

これによると，食育を生活全般の中の食として広い意味でとらえている意見が多かったが，その一方で，栄養指導，給食の指導，安全面の指導，生活習慣病などの理解など具体的な内容をあげる意見も多く見受けられた。また，食育指導は学校だけではなく家庭や地域が連携して行う必要性が高いと感じている教諭もいた。いずれにしても，食育の実施に対しては前向きな意識を持っていることがわかった。

表1．指導教諭の考える食育について（自由記述）（全体27名）

回　答　の　内　容	人数（名）
好ましい食生活を送ることができる能力や態度を育むこと	6
健康に生きるための教育	4
子供が食べるものを自分で選びとる自己管理能力を育てる教育	3
栄養の指導をすること	3
「食は人間を作る」すなわち身体的にも精神的にも食が健康にしていくことを学ぶこと	2
学校・家庭・地域が協力して，次世代を担う子どもの心とからだを守り，育成する教育	2
作物を作る，育てる，食べるといった一連のこと全て（食農）	2
食物の命をいただくという命を大切にする教育	2
食育の基本は家庭にあるので家庭への啓発をすること	1
食に関する様々な知識を身に付けさせること	1
生きる力につながる教育	1
食べ物が健康におよぼす害（生活習慣病など）があることを指導すること	1
命を育む食の大切さを学ぶこと	1
「食べる」ことへの感謝の気持ちを学ぶこと	1
給食の指導	1
知・徳・体のバランスのとれた子どもを育てるための一環的な教育	1
「食べる」ことを通して自分（人間）の生き方を考えさせる教育	1
食の安全面を教育	1
家庭によっては，加工食品や外食に頼らざるを得ないような現代に合わせた食の指導も大切な食育	1

2）栄養教育実習生の指導上で困った経験について

「問2. 栄養教諭の教育実習生を指導される上で，困られたことがありましたか。」という設問で，「1. ある」と回答した指導教諭の回答結果は図1，表2に示す通りである。

図1をみると，27名中63％にあたる17名が困った経験があると回答している。

具体的内容としては，表2より「1週間という実習期間の短さや担当教諭の忙しさ」，「自分自身が未だ栄養教諭になってはいない」，「教科や指導の内容が明確になっていない」，「栄養教諭の位置付けが明確でない」，「従来の学校給食管理実習と栄養教育実習の区分が困難である」など多岐に渡り，栄養教諭制度が見切り発車した観が否めない。しかし，これは，本調査が栄養教育実習の初年度であったためと，回答した教諭が教科担当教諭及び栄養教諭，学校栄養士が混在していたことによるものと推察される。

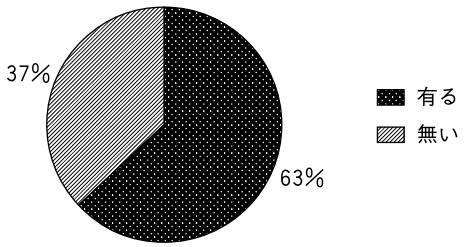

図1　栄養教育実習生の指導上で困った経験の有無

表2. 困った経験が有るとの回答者（17名）の具体的な内容（自由記述）

回　答　の　内　容	人数（名）
実習期間が短い	4
指導内容で悩んだ	4
初めてなので，指導内容や指導教科，指導計画ができていない	4
授業実践の分野，教育課程の中での位置付けが不明	2
給食管理実習と教育実習の合計2週間の中身を1週間区切りで実施するのは難しい	1
授業の準備に時間をとられ給食管理実習の方がおろそかになった	1
家庭科が兼務で毎日の指導ができない	1
技術，家庭科で担当するよりも「学活」などで指導した方が良いと感じた	1
県がどのように配置をする方向なのかなど，理解不足の点や情報の少なさ	1
担当教諭の選定が難しい	1
栄養教諭という職種が難しい	1
自分はまだ栄養教諭ではないので指導に限界を感じた	1

3）「食育の時間」の確保について

「問3. ゆとり教育の見直しが検討されている現時点において，『食育の時間』を確保することに対し，先生はどのようにお考えでしょうか。」という設問に対する回答結果を図2と表3に示す。

図2より，7割近くの指導教諭が食育の必要性を充分に感じており，ゆとり教育による時間削減の中でも食育実施の時間を確保したいと回答していた。その一方で，1割の教諭は必要性を

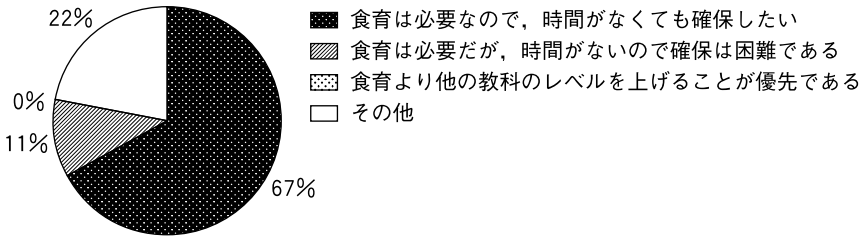

図2　「食育の時間」を確保することに対する指導教諭の考え

感じながらも，時間を確保できないため，実施は困難であると回答していた。しかし，食育よりも他教科が優先であると考えている教諭は見られなかった。さらに，その他の意見として，「既に食に関する年間計画で実施時間は確保している」，「他の教科で扱っている」，「教育課程の中で，位置付けられていない」，「家庭に向けた食育の方がむしろ大切である」などの意見もあった。

表3.「その他」との回答者（6名）の意見（自由記述）

回　答　内　容	人数（名）
家庭科，保健の各授業の単元で既に取り扱われている	1
教育課程内に位置付けないと学校間の取組に差が出ると思う	1
学活，道徳などの中で扱っていけるように工夫するべきだと思う	1
児童生徒よりもむしろ親に向けての食育が必要	1
既に年間指導計画の中に位置付けされていて確保している	1
各教科の目標を主としながら，食育と関係のある内容でねらいを達成していく	1

4）指導教諭が所属する学校における食育の実施状況について

「問4. 先生が現在所属されている学校では，食育はどの程度実施されていますか。」という設問に対する回答結果を図3および表4に示す。

図3より，「充分に実施している」と「不十分だが一応実施している」を含めると73%が食育を実施していた。その一方で，「ほとんど実施していない」とした学校も12%あった。その他の意見からは，他の教科で既に実施しているという回答が目立った。

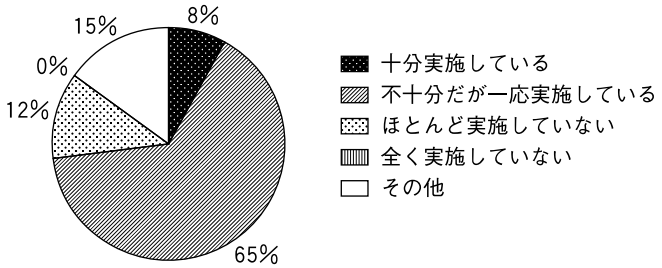

図3　指導教諭の現在所属している学校での食育の実施状況

表4.「その他」との回答者（４名）の意見（自由記述）

回　答　内　容	人数（名）
家庭科の食物分野で行っている	1
健康教育の時間で年に2回ほど実施	1
クロスカリキュラム的な取り組みで実施教科の目標，内容に含まれているものだけで実施	1

5）今後の栄養教育実習の指導者について

「問5. 今後の栄養教育実習に対する指導は，栄養教諭のみが担当すべきと思われますか。」という設問で「2. いいえ」と回答した指導教諭の回答結果は図4および表5に示す。

図4より，96％の教諭が「栄養教諭のみが担当すべきである」とは思っていないことがわかった。表5からその理由として，食育指導は学校・地域・家庭の連携を図るとされているが，学校内においても，学級担任や関連科目担当教諭など，教諭間の連携の必要性をあげていた。

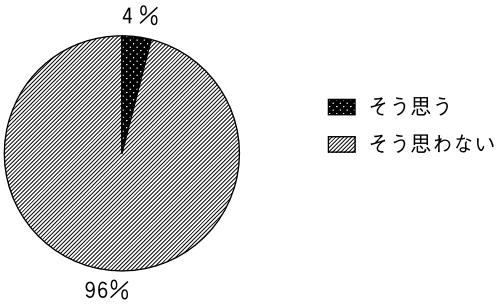

図4　今後の栄養教育実習に対する指導は，栄養教諭のみが担当すべきか

表5.「そう思わない」との回答者（26名）のその理由（自由記述）

回　答　内　容	人数（名）
学校教育全般について学ぶことが大事なので，他教科や学級担任など多角的指導の必要がある	7
子どもたちの関わりが大切なので，学級担任も指導すべきである	6
子どもたちに接する者全てに責任があるので，位置づけを図るべきである	2
学活での食育なので学級担任も担当すべきだと思う	2
他教科にも位置付けられている	2
現在，現場のほうでも導入されたばかりの栄養教諭なので家庭科の先生方と連携する必要がある	1
知・徳・体はバラバラのものでなくつながったものだから	1
学習指導つまり授業を成立させるために必要な事を，他の教諭とも協力し合う必要がある	1
食育や栄養学習に興味や意欲のある教諭はどんどん携わっていいと思う	1

6）栄養教育実習への教科担当教諭の関わりの必要性

「問6. 今後も，栄養教育実習には教科担当の先生方がたずさわる必要があると思われますか。」という設問と，関与する教科名の回答結果を図5および表6に示す。

図5より，88％の教諭が教科担当教諭の関わりの必要性を感じており，具体的な教科としては，家庭科・技術家庭科が最も多く，次いで保健体育であり，この2教科で6割を占めていた。

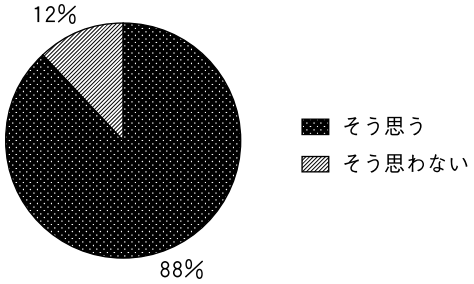

図5　栄養教育実習には今後も教科担当がたずさわる必要があると思うか

村上らの，「栄養教諭の小学校配置による影響」を調査した報告[5]によると，本調査同様に，家庭科や体育での授業が多い。また，それらは家庭科主任や学級担任との事前の連携がうまくとれて，栄養教諭の専門性が生かされていると報告している。

表6.「そう思う」との回答者（24名）の考える関与する教科名（自由記述，複数回答）

回　答　内　容	人数（名）
家庭・技術家庭	16
保健体育	12
学級活動	5
総合的な学習の時間	2
養護教諭の授業	2
全教科	2
生活科	2
社会科	1
理科	1
国語	1
音楽	1

7）学校・家庭・地域の食育の連携について

「問7. 食育の現状として，学校・家庭・地域の連携がとれていると思われますか。」という設問に対する回答結果を図6および表7に示す。

図6より，「連携がとれている」という回答は12％のみであった。その他の意見からも「地域や家庭，学校間によって差がある」，「努力の過程である」などがあげられ，連携がうまくと

れているとは言い難い様子が伺えた。茨城県保健福祉部及び茨城県栄養士会による「保育園児の親を対象とした食育に関する実態調査」報告書[6]によると，健康や食事に関する地域主催の講習会への参加経験者はわずかに2割と低い。一方，地域主催の食育講座の開催希望は，子供を対象とした料理講座が50％と若干高かったが，専門家による講演希望は1割と，保護者の食育講座への参加希望は低いことが報告されている。親世代に対して「食と健康」に関心を持たせる工夫は大きな課題であると思われる。

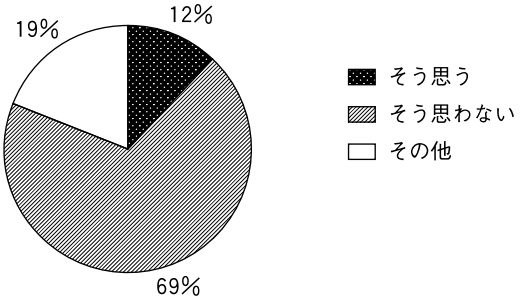

図6　食育の現状として，学校・家庭・地域の連携がとれていると思うか

一方，分見の報告[7]では，自身が福井県の栄養教諭であるという立場から，家庭や地域の連携が必要であると述べている。

さらに後藤の「中学校PTAの食に関する取り組み」の報告[8]によると，PTA活動としての食育の取り組みが，食生活改善に効果的であったと報告している。

栄養教諭の採用率が全国1位の76.3％にあり，かつPTA活動が盛んな本県においては，今後，上手に連携をとり，他県の手本となり，指導的立場に立つことを期待する。

表7.「その他」との回答者（5名）のその理由（自由記述）

回　答　内　容	人数（名）
少しずつではあるが連携をとるように努力している	1
様々な場面で連携をとる努力はなされているが全校的な取組みという点では不十分である	1
地域によって差がある	1
家庭によって差がある	1
学校によって差がある	1
なんとも言えない	1

8）栄養教育実習の事前指導で短大に対する期待

「問8. 栄養教育実習に際して，事前に当方で指導しておいて欲しいことがありましたらお書き下さい。」という設問に対する回答結果を表8に示す。

養成校における事前指導の要望としては「指導案の書き方」,「模擬授業」,「生徒との接し方」などの指導上の必要能力の他,「養成校が考えている授業計画や実習内容を知らせてほしい」,「時間が短いので事前に指導案の指導をしたい」,「実習期間を2週間に延長して欲しい」,「栄養教諭在籍校で実習をして欲しい」などの要望があげられていた。また,「学生はよくやっていた」という意見がある一方で,「常識的な礼儀作法などの指導」や「目的意識をしっかりと持つように」などの課題もあげられていた。

表8. 栄養教育実習の事前指導で短大側に期待することについて（自由記述）

回　答　内　容	人数（名）
指導案の書き方	5
具体的な実習内容，授業時間数など	3
授業計画	2
学生はよくやっていた	2
模擬授業	2
期間が短いので事前に指導案作成や内容について進めたい	1
できれば実習校は栄養教諭又は栄養士の在籍する学校にしてほしい	1
目的意識をしっかりと持つ	1
生徒への接し方	1
栄養教諭の学校での役割	1
2週間の実習にして欲しい	1
常識的な礼儀作法	1

(2) 小・中学生の食育に対する意識について

1) 全体1180名のアンケート全項目の回答結果について

表9に小・中学生1180名の回答結果を示す。

χ^2検定で有意差が認められなかったもの（有意確率 $p \geqq 0.05$）は，「性別」と「問1. 家で食事の準備や後片付けなどの手伝いをしますか」，「問4. 食事は大切であると思いましたか」，「問5. 食べることと健康には関連があると思いますか」の4項目であった。これらについては，図7～10に1180名の回答結果を示す。

一方，有意差を認めた項目は，「問2. 食べることは楽しいですか」，「問3. 今日の話は，とても大切なことだと思いましたか」，「問6. 今日の話に出てきた食品を使った料理を自分でも家で作ってみたいと思いますか」，「問7. 今までより，食べることへの関心が強くなりましたか」の4項目であった。これらの回答結果には年齢間により有意差を認めたので，残差の計算を行い年齢間における回答内容の特徴を検討した。

2) 性別について

図7に示すとおり，全体1180名の性別はほぼ半数ずつであり，年齢間による違いは認めなかった。

3) 家での食事の準備，後片付けなどの手伝いの状況について

図8より，対象の7割が「食」に関する何らかの手伝いをしており，していないと回答した者は14％と少なく，学年間による相違はみられなかった。

表9. 全体1180名のアンケート回答結果および有意確率について

		低学年	中学年	高学年	中学1年	中学2 3年	全学年	χ^2検定有意確率 p（両側）
	合計人数（名）	129	261	313	339	138	1180	
性　　別	男性	64	129	161	157	67	578	0.777
	女性	65	132	152	182	71	602	
問1. 家で，食事の準備，後片付けなどの手伝いをしますか	している	96	186	233	240	88	843	0.219
	していない	20	36	43	41	23	163	
	どちらでもない	13	39	37	58	27	174	
問2. 食べることは楽しいですか	楽しい	121	207	262	264	101	955	0.000
	楽しくない	4	8	9	8	2	31	
	どちらでもない	4	46	42	67	35	194	
問3. 今日の話は，とても大切なことだと思いましたか	思う	124	256	301	317	125	1123	0.005
	思わない	2	4	5	4	2	17	
	どちらでもない	3	1	7	18	11	40	
問4. 食事は大切であると思いましたか	思う	128	255	307	331	131	1152	0.252
	思わない	0	4	1	2	2	9	
	どちらでもない	1	2	5	6	5	19	
問5. 食べることと健康には，関連があると思いますか	思う	124	243	301	326	133	1127	0.613
	思わない	4	9	7	7	2	29	
	どちらでもない	1	9	5	6	3	24	
問6. 今日の話に出てきた食品を使った料理を，自分でも家で作ってみたいと思いますか	思う	117	194	237	227	74	849	0.000
	思わない	10	32	35	33	21	131	
	どちらでもない	2	35	41	79	43	200	
問7. 今までより，食べることへの関心が強くなりましたか	思う	115	221	255	263	103	957	0.000
	思わない	9	21	12	17	7	66	
	どちらでもない	5	19	46	59	28	157	

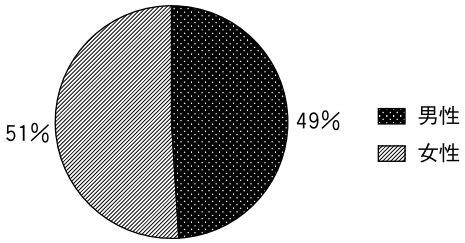

図７　性別について

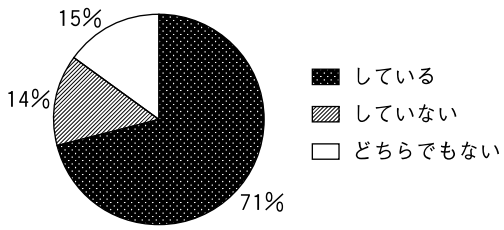

図8　家での食事の準備・後片付けなどの手伝いの状況

4）食事は大切であると思うか

図9より，対象のほぼ全数に近い97％が，「食事は大切である」という認識を持っており，学年間による相違も認められなかった。

5）食べることと健康には，関連があると思うか

図10より，96％の小・中学生は「食べ物と健康に関連がある」と認識しており，それは学年間の差異も認められなかった。

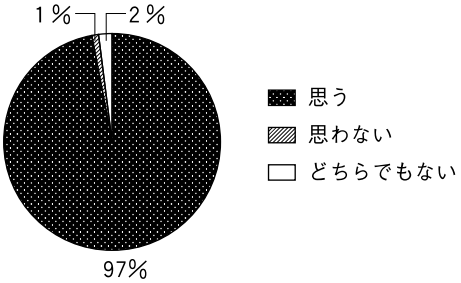

図9　食事は大切であると思うか

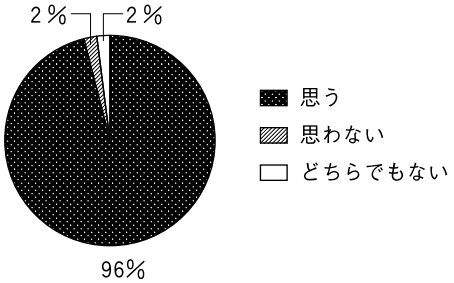

図10　食べることと健康には，関連があると思うか

6）食べることは楽しいか

以下の9)までは，有意確率 $p<0.05$ で有意差を認めた項目であったため，回答結果の特徴を残差により検討した。図11の各学年の残差から，学年が低いほど食べることが楽しく，学年が高くなるほどどちらでもないという回答が増える傾向にあることがわかった。

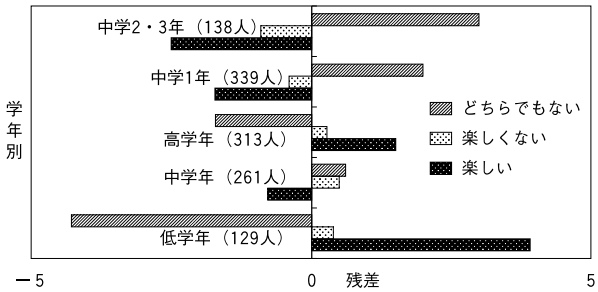

図11　食べることは楽しいか

このことから，食育の指導を行うには楽しいと感じている低学年のうちがスムーズに行いやすく，児童の反応もよいことが予想される。

7）授業の話の内容は，とても大切なことだと思ったか

図12より残差から各学年の特徴を検討すると，学年が低いほど「授業内容は大切である」と認識し，学年が高くなるほど「どちらでもない」という回答が増加する傾向にあることがわかった。

「授業の内容は大切とは思わない」との回答は，学年によって特徴的な差は認めなかった。

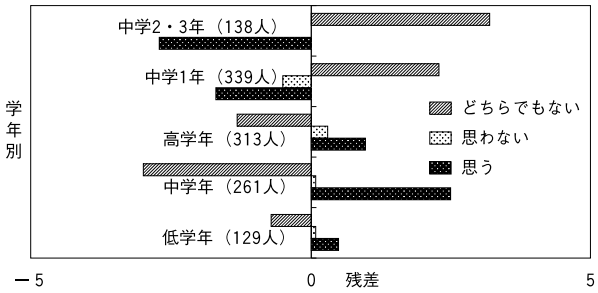

図12　授業の話の内容はとても大切なことだと思ったか

8）授業の話に出てきた食品を使った料理を，自分でも家で作ってみたいと思うか

図13の残差から各学年の特徴を検討すると，学年が低いほど「授業の話に出てきた食品を使った料理を自分でも家で作ってみたい」と思い，学年が高くなるほど「どちらでもない」という回答が増える傾向にあることがわかった。小・中学年では，「そのように思う」児童と「思わない」児童の両者が混在していることが特徴的であり，中学2～3年生では，自分で作ってみたいと思う生徒は極端に少なく，「思わない」との回答が多いことが特徴であった。

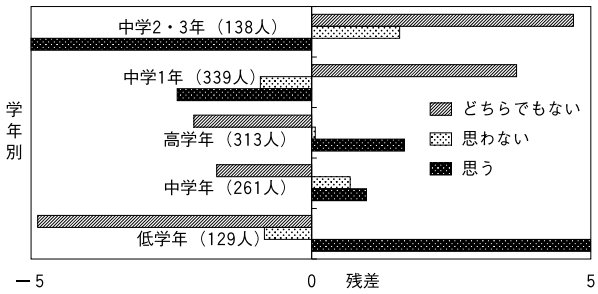

図13　今日の話に出てきた食品を使った料理を自分でも家で作ってみようと思ったか

9）今までより，食べることへの関心が強くなったか

図14の残差から各学年の特徴を検討すると，学年が低いほど「今までより，食べることへの関心が強くなった」と回答し，学年が高くなるほど「どちらでもない」という回答が増える傾向にあることがわかった。しかし同時に，小学校低学年及び中学年は，「食べることへの関心が強くなったとは思

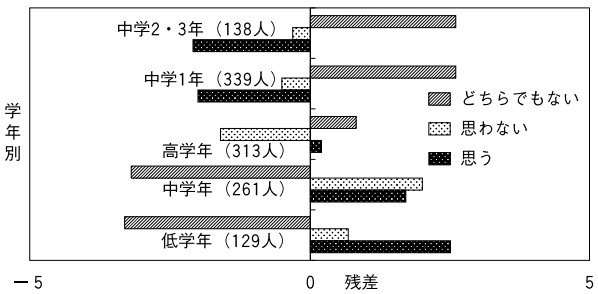

図14　今までより食べることへの関心が強くなったか

わない」という回答も特徴的だったことから，食育の授業の展開によっては，食べることへの関心が強くなるのも低学年のうちである一方，関心を強化できないのも低学年であるということがわかった。さらに相良の中学生を対象とした朝食の摂取状況の報告[9] によると，食べる時間がない，食欲がないなどの夜型生活である理由から，多くの生徒が朝食をとっていない。生活習慣が既に構築されている中学生の食に対する意識を改善するのは，小学校の低学年に比較し困難であることが推察される。

Ⅳ．おわりに

本研究は栄養教育実習実施の初年度である平成18年度に行ったアンケート調査をまとめた結果である。栄養教育実習を行うに際して，実習受け入れ校の困惑は当然高かったと思われるが，教育実習担当教諭は食育の必要性を感じており，また栄養教育実習に向けた改善意見も多く提起され，養成校としては非常に感謝している。しかし学校の現状として，食育実施の時間を確保することの難しさ，家庭や地域とのさらなる連携の強化，栄養教諭の給食管理業務と授業の両立など多くの検討されるべき課題が存在する。

そうした中にあって，制度創設2年目の平成18年度に，鹿児島県では全国で一番多くの栄養教諭が誕生し，さらに3年目の平成19年度には，本県学校栄養士の7割以上（148名）が栄養教諭となった。しかし，全国的には，その任用が期待されているほどは進んでいないのが現状である[10]。鹿児島県のこの状況の背景には，県知事はじめ本県行政の理解はもとより，制度創設に向けた本県学校栄養職員の強い悲願と，その間の食育への取り組み，弛まない努力があったと思われる。

今後，県内外からの，本県の食育に対する期待は非常に大きく，栄養教諭の存在意義をアピールしていく責任があると考える。

また，実習生の評価授業後に調査した小・中学生の食育に対する意見からは，食べることの大切さ，楽しさを充分に感じていることがわかった。さらに低学年であるほど素直に授業内容を受け入れる傾向がうかがえ，食育指導の効果があがることが認められた。渡邊らの小学校教職員の食育への取り組みに関する報告[11] によると，教員は食育を実施する際に主として1年生と5年生に対して注目したいと回答している。これは日常，小学生の教育に携わる教員が日ごろから感じている1年生の状況や，家庭科の授業が開始されるのが5年生であるためというのが理由であるが，1年生に対しては実際に児童が回答した本調査からも同様なことが認められた。

現在の我が国における生活習慣病の増加現象や，医療制度改革・診療報酬改定などを考えると，疾病の一次予防は大きな課題であり，個人のQOLを実現することにつながる。今後，栄養教諭制度が定着し発展していくことを心から期待し，願うのは著者らだけではないと確信する。

最後になりましたが，本学食物栄養専攻学生の栄養教育実習，給食管理実習をお引き受けくださり有意義な実習をご指導いただきました各小・中学校，給食センターの諸先生方，ならびに授業後に実施しましたアンケート調査にご協力してくださった小・中学生のみなさんに心より深く感謝いたします。

引用文献

1) 文部科学省「文部科学白書（平成16年度）」：国立印刷局，東京，17（2005）
2) 大富あき子，青木五百子，大内山雅枝，花木秀子：栄養教諭制度の施行に伴う教育活動記録－Ⅰ，栄養教育実習開講までの流れ，鹿児島純心女子短期大学紀要，37，55－67（2007）
3) 大富あき子，大見奈緒子，大内山雅枝，花木秀子：栄養教諭制度の施行に伴う教育活動記録－Ⅱ，鹿児島県内学校栄養士を対象とした栄養教諭制度に関する意識調査，鹿児島純心女子短期大学紀要，37，69－77（2007）
4) 内田治:「すぐわかるSPSSによるアンケートの調査･集計･解析」, 東京図書, 134－141 (2004)
5) 村上亜由美，荒井紀子：栄養教諭の小学校配置による家庭科及び学級活動への影響，平成17年度福井県における家庭科主任及び学級担任への調査をもとに，福井大学教育地域科学部紀要，45，1－14（2006）
6) 茨城県保健福祉部，社団法人茨城県栄養士会「子どもの食育に関する実態調査報告書」，(2002)
7) 分見三枝子:期待される栄養教諭，栄養教諭第一期生として今期待されること，学校運営，10，22－25（2005）
8) 後藤博美：停滞気味のPTA活動が「給食」「食育」で息を吹き返した！，食農教育，4，138－141（2006）
9) 相良多喜子：中学生の健康作り研究，栄養教諭を中核とした食に関する効果的な研究授業の取り組みの検討，金沢学院短期大学紀要，48，67－75（2007）
10) 金田雅代：栄養教諭をどのように活かしていくか，教職研修，11，46－49（2005）
11) 渡邊宏美，上田伸男：小学校教職員の食教育への認識，実践および課題，宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要，28，453－462（2005）